

横浜の名木玉楠 「横浜名所絵」(浜菱連横浜納札会)より



岡道孝氏 (1900~1984)

1968年自宅前で写す

貴重な歴史資料を当館へご寄贈くださいすることになりました。

この岡コレクションは、岡医院の八代目にあたる故岡道孝氏（一九〇〇～一九八四年）が情熱をそいで蒐集されたものです。道孝氏は、地域の医療に貢献してきた岡家の後継者として活躍する一方、芸術・文化への造詣も深く、そのすぐれた鑑識眼によって、江戸時代から明治・大正・昭和期にいたる幅広い分野を網羅した浮世絵やランプ、

民芸品など数多くの品々を蒐集（現在の川崎市高津区久本）で、江戸時代から昭和にいたるまで、八代にわたって医院を開業していた旧家の岡家が、古書や南武鉄道関係の資料、新聞・雑誌、浮世絵、絵地図、絵づくり、絵はがき、双六、ポスター、各種ラベル、ステレオ写真など古写真、さらに明治大正期の都市や生活の匂いを色濃く残す看板や扇風機、電話機、ランプなど、

この岡コレクションは、岡医院の八代目にあたる故岡道孝氏（一九〇〇～一九八四年）が情熱をそいで蒐集されたものです。道孝氏は、地域の医療に貢献してきた岡家の後継者として活躍する一方、芸術・文化への造詣も深く、そのすぐれた鑑識眼によって、江戸時代から明治・大正・昭和期にいたる幅広い分野を網羅した浮

開港のひろば

YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY NEWS

編集・発行／横浜開港資料館（財）横浜開港資料普及協会
横浜市中区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100
発行日／平成7年11月1日
印 刷／中川印刷株式会社

企画展 「甦る明治大正の記憶」から —岡コレクション展—から

このたび、旧橘樹郡高津村（現在の川崎市高津区久本）で、江戸時代から昭和にいたるまで、八代にわたって医院を開業していた旧家の岡家が、古書や南武鉄道関係の資料、新聞・雑誌、浮世絵、絵地図、絵づくり、絵はがき、双六、ポスター、各種ラベル、ステレオ写真など古写真、さらに明治大正期の都市や生活の匂いを色濃く残す看板や扇風機、電話機、ランプなど、

なお夫人は、日本画家川端龍子（昇太郎）氏の長女で、道孝氏の芸術への造詣の深さはこうしたことによ来しているのかもしれません。また、氏のご長男で寄贈者代表の岡信孝氏も、日本画家としてのすぐれた藝術的見識・感性によって、琉球漆器や陶磁器などの古美術品を蒐集したことでも知られています。

さらに岡家の姻戚として、日本画家の平福百穂氏や陶芸家浜田庄司氏、版画家棟方志功氏の存在があり、その芸術的環境の豊

ショーンをとおして、明治大正期の人びとが生きた時代の古い記憶をよびもどし新しい息吹を感じてみようとするものです。こうした文化遺産をここによく横浜市にご寄贈くださり、本展示の開催と図録の刊行にお心を寄せてくれました。

また、岡医院の六代目にあたる重孝氏（一八四七～一九二〇年）は、医院を一八七一（明治四）年に継いだのち、一八七九年（同二）年から久本村会議長や溝の口・久本村等七ヶ村連

合村会副議長を歴任、一八八九年（同三）年には高津村村委会員に当選、さらに同年五月高津村初代村長に選出されました。その後一八九九（同三）年に郡制が施行された際、橘樹郡郡議員にも当選し、同年一二月には副議長に就任、地域政治のリーダーとしても活躍しています。七代目の岡信一氏（一八七六年～一九三五年）も、一九一二（明治四五）年から一九二八年（昭和三）年まで高津村村委会員として活躍し、一九二七（昭和二）年には橘樹郡医師会会長に就任しています。岡家は商業のほかに、こうした村の公務にも地域の名望家として尽力したこと、これが特筆されます。

今回の展示は、この岡コレクションをとおして、明治大正期の人びとが生きた時代の古い記憶をよびもどし新しい息吹を感じてみようとするものです。これら貴重な資料を広く公開し、岡家の好意に少しでも報いることができれば幸いです。

（吉良芳恵）

企画展

「甦る明治大正の記憶」から

今回の展示を機に、岡家から寄贈されることになったさまざまな資料のいくつかを、写真で紹介します。これらの資料の全貌は、『横浜開港資料館所蔵岡コレクション図録－甦る明治大正の記憶』をご覧下さい。

(吉良芳恵)



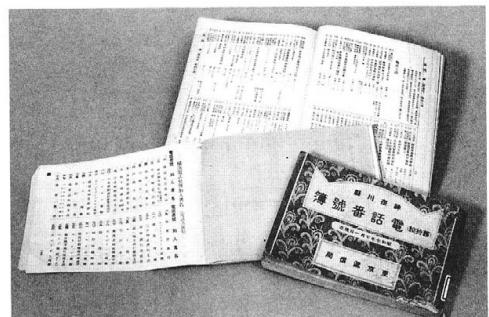
横浜毎日新聞 1874(明治7)・1875(同8)・
1879(同12)年



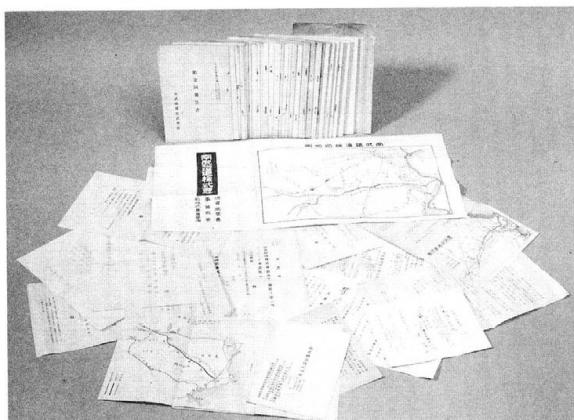
関東大震災関係新聞 1923(大正12)年9～12月の
中央新聞・東京日日新聞・報知新聞・都新聞



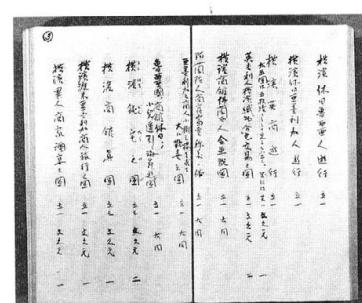
時事漫画 『時事新報』付録 1925(大正14)～1931(昭和6)年



神奈川県の電話帳
1892(明治25)・1926(大正15)・1932(昭和7)年



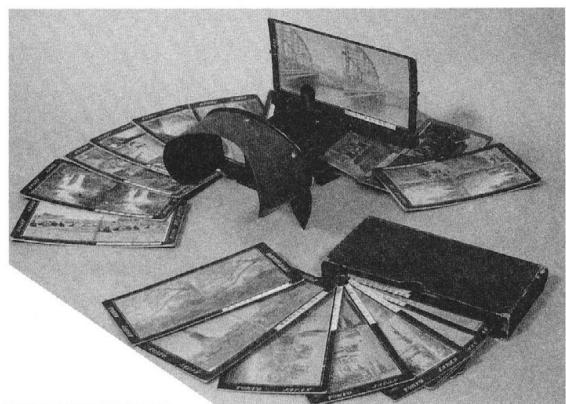
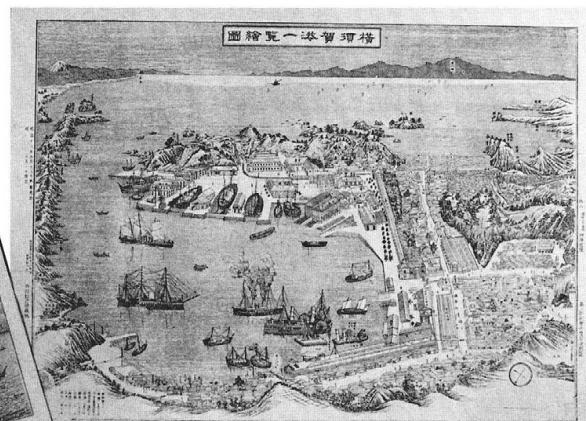
南武鉄道株式会社関係資料
1920(大正9)～1937(昭和12)年



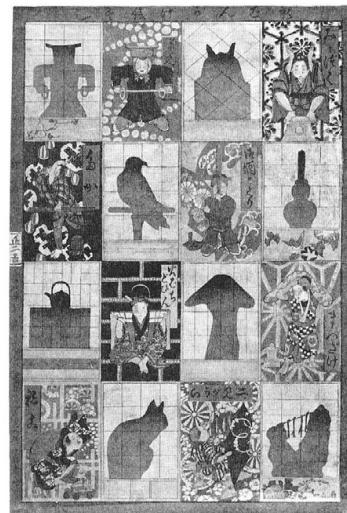
家蔵江戸版和蘭絵解題・目録 岡道孝



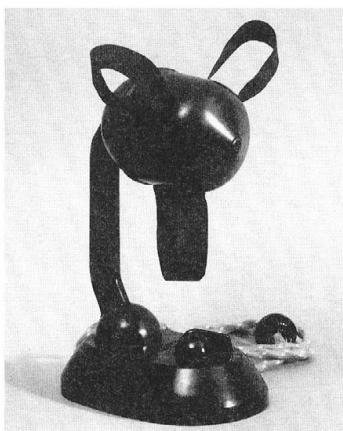
精錡水看板 岸田吟香製

ステレオ・ビューウー
とステレオ写真 明治期

横須賀港一覧絵図 1879(明治12)年



新ぱんかけ絵尽し 1885(明治18)年



AEG社製扇風機 (ドイツ)



竜吐水製造元看板 横浜福富町 桜井吉右衛門

展示余話

「羽民遺墨」 —蟹が這う横浜の文人群像—

「横浜史料の世界」展にあわせ『五味亀太郎文庫目録』を刊行した。開港前後から関東大震災までの横浜史料と、いう枠組みの中に、経済から風俗洋書から和本、一枚ものと、内容・形態とともにあらゆるジャンルのものが含まれている。こうしたことから、「目録」には書名・著編者名索引をつけ、一枚の史料についても、多分に恣意的だが作者・画工名なども拾つたから、利用していただけるものと思つていて。しかし、校正も大分重ねたつもりだが、いくつか誤植・間違いがあった。

同時に、「太田之草鞋II」に排列すべき史料が後で見つかった。尤も、「草鞋」は、元来四分冊の貼込帖が解体されていていたものを、今回の目録作成あたり、膨大な仮整理史料群の中から貼込台紙の紙質や大きさ、縫じ糸の糸穴や断裁面を細心かつ大胆に突き合わせて復元するという、職人芸的な作業があつたことを告白すれば、少しは察してもらえるだろうか。今後も追録すべき史料が出てくるかも知れない。改訂版での訂正・追加を期したい。

さて、本稿の表題「羽民遺墨」がそれで、五味文庫15—35として追録したい。A4判大の台紙に二枚、一部重なって貼付けられている。下部は「不転」

と印字があるのし袋、「亡父羽民遺墨／画蘭模刻」と微かに刷り込まれた文字が読め、同時に大小二つの花模様が刻してある。もう一枚は、それよりや小さめの筆墨の断簡で、竹の画に「竹有書体／幹篆 葉楷 枝草」、それに「としあたま穂たてのからき行ひわ／つめる仏の手ふさをそおもふ」の歌がある。この史料に、五味亀太郎自筆と思われる「弁玉の歌筆蹟？」の付箋がある。五味は、独特的の書体から歌僧大熊弁玉の筆蹟と見当を付けたのだろうが、これは、「羽民」の遺児が亡父の形見としてその遺稿を適当な大きさに断裁し、のし袋に入れて故人の知友に配つた一点と考えられよう。それで

は、「羽民」とは誰か？
石井光太郎「歌僧弁玉とその周辺」に、明治6年4月荒井羽民が会主となつた書画会に平塚梅花・清水硯圃らが出席したとある。これが「羽民」か。荒井羽民について、これ以外詳らかにしてもらえるだろうか。今後も追録すべき史料が出てくるかも知れない。

さて、本稿の表題「羽民遺墨」が元年に来浜、還俗して梅花を名乗り、のち尾上町に月泉吟社を主宰した。明治15年刊の『秋錦山房詩鈔』により、

梅花と南多摩の民権家石坂昌孝、小島為政、中溝昌弘、橋本政直らとの親しい交流が跡付けられる。色川大吉は、枕山一梅花らの漢詩文学が、彼ら豪農知識人層に広く浸透し、歴史変革の精神基盤となつたとして、積極的な評価を与えていた（『明治の文化』）。硯圃は、敬三郎と称し、常陸土浦藩士、越後の長谷川嵐溪に南画を学び、山水画を得意とした。明治初め来浜、11年3月に47歳で病死した。市内久保山墓地に枕山撰・書の碑がある。森田友昇『横浜地名案内』、川井景一『横浜新誌』などの挿絵で開化期横浜の風景や街角を描き、また神奈垣魯文経営の新聞総覧所、野毛山の窟蝶蟻亭の画は有名だ。五味文庫に硯圃追福の書画会チラシが二枚ある。一つ（14—66）は、11年4月21日常盤町八百藤楼に開催のもの。幹事に弁玉・魯文・梅花・中山槐子、ほか門人38名が名を連ねる。その二（15—19）は、翌12年9月1日足柄上郡最乗寺に開催のもの。幹事に松田の中村不崩（舜次郎・足柄上郡長）、柏屋の山口雨岳（左七郎・大住・滝綱郡長）、箱根の中田暢平ら。出席者99名のなかには東京から枕山、服部波山、横浜から梅花・弁玉・安田米斎ら、他に箱根の福住正兄、小田原の小西正蔭（県会副議長）・片岡永左衛門、平塚の斎藤麗山・大沢精一、大磯の鳴立庵寿堂、野津田の石坂昌孝（県会議長）らがいる。県央から西湖にかけての地域文芸、相州民権運動の指導者たちが参加していることに注目したい。

弁玉は、江戸浅草に生れ、嘉永3年63才で死去、高島山公園に枕山撰・書の碑がある。弁玉及び梅花一門の合作による詩歌集『王盛集』一冊（7—3）がある。硯圃は、画と詩（題、仮名読新聞）を寄せている。収録された歌をいくつか見てみよう。

停車場 犬山周造（神奈川）
乗れば飛ぶ鳥もしかとミな人の
いそく心くるままつらむ
蝙蝠傘 倉本楼はな女（同）
さして来る人もあると夕暮を
までハめにつくかはほりのかさ
剪髪女 堀内立雄（藤沢）
黒髪のすゑきりすしてしたをやめの
物をおもふ事ハたつやたゝすや
人力車夫 岡野良哉（程ヶ谷）
なりはひにいそく思ひのむれ車
乗るあき人もちからきそはむ
他に、小学校・灯明台・種痘・商社・
蒸気車・電信機・石鹼・嵩衣・新聞紙など開化の事物を主題に、街の騒動を歌うもの、君恩を讃えるもの、はた又新旧の間で揺れる心を詠んだものなどないが間もなく物故したものか、寡聞にしてその後の記録を知らない。

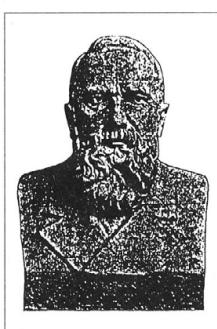
開化期の横浜を舞台にした文人たちの活躍、弁玉らの作歌活動、その人的交流と地域的広がり、そして横浜という「場」の歴史的役割について、改めて考えさせられた。なお、石井光太郎氏から種々ご教示を賜った。（佐藤孝）

横浜人物小誌

40

ジェラール（一八三七～一九一五）

故郷、ランス市に錦を飾る



ジェラールの胸像

一旦離日、八六年頃に再来日し九〇年頃に最終離日したようである。初来日から最終離日の年まで通算約三〇年間となるが、はつきりしていない。

フランス人、ジェラールは幕末に来日し、軍用日用品供給業や、肉屋、船舶給水業、西洋瓦・レンガ製造工場経営とつぎつぎに事業を開拓した初期の横浜居留民のひとりとして名前は知られていたが、経歴などについてはわからぬことが多かった。

近年、新出資料を用いてジェラールについてのいくつかの新しい事実を記すことができた（当館編『よこはま人

物伝』神奈川新聞社発行、一九九五年など）。あらびその後、別の資料を入手し、晩年のようすがかなり詳しくわかったので以下に紹介したい。

入手資料は、E.デュボン著「ランスの博愛家、アルフレッド・ジェラール」Eugène Dupont, 'Un philanthrope Rémois, Alfred Gérard', *Almanach Matot-Braine*, 1931'、およびランス市博物館 Musée Saint-Rémi 作成の「ジエラール・コレクション目録」（一九七八年）、仏新聞記事などである。新資料によると、いずれも来日年は一八六三年と記しているが、在日年数については五年間説（1863-78）と、三〇年間説（来・離日の記載なし）の二説ある。横浜居留地の住所録である『ディレクトリー』によると来日年は同じく一八六三年頃で、七八年頃に

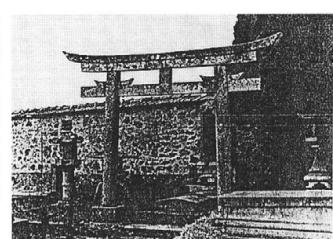
遺産を相続）を伴ってしばしばパリにでかけては、セーヌ河岸のあぶなつかしい店で掘り出してきたものであった。農業技術関係の本が主で、玉石混淆であつたが、総数二万三〇〇点を数えた。横浜で築いた財産にささえられた。藏書中で最も高価な本は文芸本と美術本のきわめつけの初版本であったが、その後、第一次大戦時に空襲で大きな被害を被った。

農業サークルの設立者

藏書の中心が農業関係であったことからもわかるように、ジエラールは地域の農業に深い関心を寄せていた。そして遺言にランス農業サークル Cercle Agricole Rémois 設立のために遺産を使うよう書き残した。この遺言は一

二年後の一九二七年に果たされ、藏書もここにおさめられた。サークルは開設以来、映画制作をはじめとする農業技術の普及事業を開拓し、また藏書の蒐集も継続しておこなった。一九四四年には新たに開館した農業芸術館 Maison des Agriculteurs が、サークルの活動と藏書が引き継がれた。

日本コレクション



ジェラールの墓の鳥居

にランス日本週間と銘打つて同美術館で開催された「館藏日本の武具」展がある。同館の「ジエラール・コレクション目録」によると総数約二五〇〇点にものぼる日本コレクション（中国や朝鮮などのものも若干あり）である。

二年後の一九二七年に果たされ、藏書もここにおさめられた。サークルは開設以来、映画制作をはじめとする農業技術の普及事業を開拓し、また藏書の蒐集も継続しておこなった。一九四四年には新たに開館した農業芸術館 Maison des Agriculteurs が、サークルの活動と藏書が引き継がれた。

ジエラールは一八九一年（帰郷後間もなくか）、日本で蒐集したコレクションをランス市に寄贈し、その後も追加寄贈をおこなっている。仏像・能面・刀剣・陶器・木版画・古錢などで、最も古いものでは一五世紀の刀がみられる。ランス市美術館におさめられ、少なくとも二回（一九一三年と三一年）は展示会が開かれた。近年では八七年

にラント日本週間と銘打つて同美術館で開催された「館藏日本の武具」展がある。同館の「ジエラール・コレクション目録」によると総数約二五〇〇点にものぼる日本コレクション（中国や朝鮮などのものも若干あり）である。

大戦勃発前にジエラールは養老院に入った）の地下室に安置されたとあり、養老院によると、亡骸は養老院（第二次大戦勃発前にジエラールは養老院に入った）の地下室に安置されたとあり、養老院で死亡した可能性もある。葬儀が執り行われている大寺院の上空では空中戦が交わされるという状況下、わずか二〇名ばかりの会葬者に見送られてのさびしい葬儀であったという。墓には立派な鳥居が建てられた。

おわりに

貴重な新資料を送ってくださいたところを、立派な鳥居が建てられた。フランス人、Jules Gérard の死後間もなくか、日本で蒐集したコレクションをランス市に寄贈し、その後も追加寄贈をおこなっている。仏像・能面・刀剣・陶器・木版画・古錢などで、最も古いものでは一五世紀の刀がみられる。ランス市美術館におさめられ、少なくとも二回（一九一三年と三一年）は展示会が開かれた。近年では八七年

深く感謝いたします。（中武香奈美）

Julien Charton (のちジエラールの

この事を察知した彼は伊勢參宮に行くと称して舟にて海路房州に渡り江戸芝の隠家に逃れたものであった。この間の事情については東京蒲田女塚に住む老歴史家中里機庵翁が明治四十五年頃から調査をつづけた結果、最近に至り判明した。この老歴史家中里氏は夙に幕末史の研究家として知られるばかりでなく日持上人の足跡を満州・蒙古まで踏査して研究した人であって、氏は重兵衛について次のやうに言つてゐる。偉人としての重兵衛の存在が幕末史を彩り且つその推移に重大な関係があることは見逃せぬ。彼の国家に対する功績は上州に於て言ふならば新田義貞公以来の人傑である。

この記事によれば、重兵衛は新田義貞以来の勤王の志士であり、水戸派の浪士にも金錢的な援助をしていたとある。また、この新聞は一二月三日に重兵衛の特集を掲載し、重兵衛が万延元年の桜田門外の変に際し、井伊大老を暗殺するのに使用したピストルを浪士に提供したと伝えている。

もちろん、これらの点についても確かな文献史料は残っていないが、ここで注意したいのは重兵衛が昭和期に入つて勤王の志士として再評価されるようになったことである。記事の中にも「勤王の志士としての重兵衛像」についてはあまり知られていないとあるから、こうした重兵衛像はこの頃作られたことになる。もう少し詳しく見てみよう。

史料三は、昭和一年十月に横浜市

中区で重兵衛の顕彰碑を建設するための集会が開かれた時の趣意書である。この趣意書で興味深いのは顕彰碑建設準備会の世話人代表として国家主義者本愛國者共同闘争協議会・国民協会の主要メンバーとして活躍していたから、勤王の志士としての重兵衛像が語られるようになつた背景にはこうした国家主義者の活動が強く影響していたことになる。また、そうした状況下で、ここで虚実とりませた重兵衛像が作られていったと思われる。

〔史料三〕

勤王の義商・貿易の恩人

中居屋重兵衛顕彰碑趣旨

明治維新的裏面には幾多の匿れたる人材が今尚ほ未発掘のまま潜んでいるのであります。我が中居屋重兵衛の如きは恐らくその中の最大の一員であらります。また桜田事変の背後に在つて重大なる役割を演じたことも特筆に値する彼の大功績であります。而も重兵衛の末路頗る蕭条として逃竄潜匿の裡に江戸の陋屋に窮死するに至つたのは、主として彼が勤皇の志士を庇護したる事が幕府の忌諱に触れたのに依るといふに於て、彼は畢竟其の生命を皇事に捧げたるものといふも敢て過言ではないのであります。(中略)

重兵衛は上州吾妻郡の人、夙に郷里を去つて江戸に出て、當時江戸第一の書肆たりし和泉屋に奉公中、儒者林鶴梁の知を得て勤王の精神を注入され、大いに国事に尽さんとする大志を發しました。偶々幕府は安政の條約により所期の目的を貫徹せしめられんことを。

ることとなつたが、(最初の取極め)の集会が開かれた時の趣意書である。

神奈川なりしが種々の事情にて横浜に変更)当時の横浜は人烟稀薄狐狸の棲家に異らず、内外商人いづれも此地で

取引を為す事を肯じなかつたのであります。幕府は困惑して重兵衛を擇んで横浜開拓の事を托し、重兵衛亦た進んで之に応じ、先づ同地に広大人目を駭す商館を設け、率先してオランダ人との通商を開始したのであります。ここに於いて之に倣ふもの続々として現れ遂に横浜が今日の隆盛を呈するの基を成したのであります。

重兵衛の功績は單り横浜を開拓し、當時勤皇運動の支柱たりし長州・水戸等の志士に対し陰に陽に多大の支援を与えたのであります。長州の桂小五郎の如きも即ち其の中の一人なりと伝えられます。また桜田事変の背後に在つて重大なる役割を演じたことも特筆に値する彼の大功績であります。而も重兵衛の末路頗る蕭条として逃竄潜匿の裡に江戸の陋屋に窮死するに至つたのは、主として彼が勤皇の志士を庇護したる事が幕府の忌諱に触れたのに依るといふに於て、彼は畢竟其の生命を皇事に捧げたるものといふも敢て過言ではないのであります。(中略)

昭和十一年十月
中居屋重兵衛顕彰準備会
世話人代表

津久井龍雄

以上二つの重兵衛像を紹介したが、これらの重兵衛像がどれほどの眞実を含んでいるのか、どういった史料に基づいて重兵衛像が作られたのか、今までには調べようがない。しかし、現在、確実な文献史料が残っていない話については、ペリー艦隊乗組員への生糸販売にせよ、大老暗殺への関与にせよ歴史を学ぶ者としては、そのような事実はなかったと思われるが良く分からぬと答えるしかないのです。

また、現在残っている中居屋関係の史料については水戸藩家臣の子孫と自稱する方によつて多くの「偽物」が作成されたため、これが眞の中居屋像を知る上で大きな障害になつてゐる(この点については松本健一著『眞贋』新潮社を参照)。また、萩原進氏も有隣新書『新版、炎の生糸商中居屋重兵衛』の「新版刊行にさいして」の部分で、この点に触れている。

こうした現状の中で我々は從来刊行されたすべての中居屋研究をもう一度再検討する必要に迫られているといえよう。また、残された史料の中から確実なものを選び出す作業が求められてきつてゐる。これらの点については稿を改めて述べていきたいと思っている。

(西川武臣)

閲覧室から

今日は、当館で閲覧できる外国語新聞の複製のうち、「横浜開港資料館所蔵新聞・雑誌目録」刊行後に新たに複製を作成したり、欠号を補充したものの紹介します。

それぞれ閲覧室の開架書架にありますので、ご覧ください。

〔新たに複製を作成した新聞〕
①『ジャパン・ヘリテイジ』週刊版
(The Japan Herald: Being the
Weekly Edition of the "Japan Daily
Herald")
新シリーズ 一九〇七年七月五日—
一月十七日
イギリス人ハンサード (Albert
W.Hansard) が、一八六一年一月

資料館だよ

(1) 「甦る明治大正の記憶」——横浜開港資料館所蔵岡コレクション—— 11
／1／平成8年1／28 橋樹郡で江戸時代から昭和にいたるまで医院を開業していた旧家である岡家が蒐集した新聞や浮世絵、さらに都市や生活の匁を色濃くのこすさまざまな資料によって、明治大正期の人びとの生活と美意識を再現する。

「新聞插絵にみる明治の生活文化」、昭
信孝（日本画家）「岡コレクションを
語る」
受講料 五百円（展示観覧料
含む）
講演会終了後担当者が展示の解
説をします（募集中員 先着八〇名
往復葉書でお申し込みください）
込一元 〒231 横浜市中区日本大通3
横浜開港資料館講演会係

▼講演会

ラルム』に変更した。本紙はその過刊版。

代表的なイギリス系英字紙の地位にあった同紙であったが、一九〇五年からドバイツ系英字紙に変わり、一九一五年九月に発行停止となるまで続いた。

②『ジャパン・ガゼット・メール・サンマーリー・アンド・シッピング・アンダード・マーケット・リポーレ』(The Japan Gazette, Mail Summary and Shipping and Market Report) 一八七三年[明治四]年一二月一日至一八七四年四月二三日(欠号有り)

イギリス人ブラック(John R. Black)が一八六七年一〇月一一日に毎日刊行の英字新聞『ジャパン』に、

③『ジャパン・ガゼット』

『日本・カナダ』(The Japan Gazette)

ガゼット』を横浜で創刊した。同紙は、関東大震災で打撃を受け、廃刊する。本紙は、その海外向けとして、日本一回発行された。『ジャパン・ガゼット・フォートナイトリー・サマリー』(The Japan Gazette, A Fortnightly Summary of the Political, Commercial, Literary, and Social Events of Japan 開架書架に複製有り)は、その後続紙かと思われる。

④ 『ジャパン・タイムズ』(The Japan Times) 一九二三年三月(欠号有り)

日ズ
一八六七年二月三〇日、新シリ一
一八七八年一月五日—六月二九



▼当館館長が逝く

D. Rickerty) が、一八六五年九月八日から横浜で発行した週刊の英字新聞。一八七〇年にハウエルらに売却され、『ジャパン・メイル』に変わる。

⑤『ジャパン・タイムズ・オーバーランド・メイル』(The Japan Times' Overland Mail)

一八六七年一月一八日

本紙は、一八六五年九月三〇日から、『ジャパン・タイムズ』の外国向けとして、隔週発行された。

開拓者が中間
に訪れました。
横浜市功労者。
享年六十二歳。